慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「階級」概念は時代遅れか？： イギリス社会史におけるポスト・モダニズムとその批判的検討
Sub Title	Is the Concept of "Class" Obsolete?: Some Comments on Postmodernism in British Social History
Author	松村, 高夫(Matsumura, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.1 (2004. 1) ,p.259- 281
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合隆男教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20040128-0259

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「階級」概念は時代遅れか？

――イギリス社会史におけるポスト・モダニズムとその批判的検討――

松村高夫

一　ポスト・モダニストによる「階級」概念の否定
二　旧来の社会史による一九世紀イングランドの歴史把握
三　ステドマン・ジョーンスの「チャーティズム再考」
四　「階級の言語」をめぐる論争
五　リベラリズム研究の主流化
六　ポスト・モダニズムの終焉？

一　ポスト・モダニストによる「階級」概念の否定

ギャレス・ステドマン・ジョーンズは、一九九六年に『ヒストリー・ワークショップ・ジャーナル』誌上の論稿「決定論の固定―一九九〇年代の言語論的歴史アプローチの更なる発展にとってのいくつかの障害」で、「一九七〇年代末以降、二〇年以上イギリスなどで興隆していた歴史のマルクス主義的アプローチは、突然かつ最終

的な衰退の時期に入った」[1]と言明し、マルクス主義に代わる歴史理論として「言語論的転回」を挙げた。ステドマン・ジョーンズは一九八〇年代初めに『階級の諸言語』を著し、ポスト・モダニズムの方法をイギリスで最初に歴史研究に適用し、それまでのチャーティズム研究を全否定し、新たに「チャーティズムの再考」を実践していた。[2]

ステドマン・ジョーンズは、マルクス主義的アプローチの危機の兆候は、政治的には次の三つにより現れていたと述べる。即ち、(1) フェミニズムが台頭し、階級概念では説明できない経験について疑問が提起されたこと、(2) 東欧からの抗議運動の高まりと緑の党運動の開始によりますます急進主義や自由主義がマルクス主義は正義と権利を放棄したとして反発したこと、(3) 自然を克服することを強調したマルクス主義にエコロジストが反発したことである。さらに、理論的にはアルチュセールがマルクス主義を構造主義と精神分析に基づき再理論化すべく試みたが、結果的には失敗したことを挙げた。[3] ジェリー・コーヘンによる一八五九年の『経済学批判序説』を一九七〇代の理論と矛盾なく統一させようとする試みも、一九世紀中頃のマルクスのアプローチを形成した形而上学的理論と現代の理論との乖離を解決できなかったという。[4] ステドマン・ジョーンズの論稿には、マルクスの理論が資本主義の経済法則を解明したものであり、現代社会も資本主義である限り、理論修正の必要性はあるものの基本的には有効性をもつといった視角はみられない。彼はさらに、この哲学上の未解決な課題に対してマルクス主義が硬直的であるということは、歴史家の経験主義的研究によりいっそう確認されたとして、次のように指摘する。「一九世紀と二〇世紀のイギリス労働史のケースとして、例えば、次のことが納得的に示された。それは、労働者階級の政治を保守的に中断した『労働貴族』'labour aristocracy' という想定上の存在は、神話であるということ、一九世紀末の労働者階級が『熟練解体』'deskilling' 過程によって急進化したという考えにはほとんど根拠がないこと、および、多かれ少なかれ一九世紀と二〇世紀を通して労働者の異なる集団

間の境界線対立のほうが労働者と雇用者の間の対立よりより大なる重要性があったということ、である。[5]」

「言語論的転回」についてステドマン・ジョーンズは、それがエイサ・ブリッグスの「階級」という言語についての研究やウィリアム・スウェルの「労働」という言語についての研究[6]とは異なり、言語を現実性、実在の反映とはみなさず（反映論の否定）、言語（より正確には「ディスコース」）が外部の、言語以前の、指示対象から発生することを拒否する（言説は直接指示対象をもたないという理論）ことを改めて確認してから、次のようにいう。「潜在的にはこれ〔言語論的転回〕は史的唯物論の核心的仮定とマルクス主義歴史学の種々の解釈の全て――思想が社会的存在により決定されるということ――に対する重大な挑戦を示していた[7]」と。この「言語論的転回」によって、マルクスのイデオロギー論から自由になり、「社会」の歴史と「知」の歴史の関係について新しい道が開けた、思想を上部構造に属する二次的なものとして最終的には（経済的、物質的）「土台」に還元されるものとして解釈されることから自由になった、としたのである。

他方、ポスト・モダニズムのもう一人の論客パトリック・ジョイスは、『社会史』誌上の論稿「社会史の終焉？」のなかで、ポスト・モダニズムからの批判に対し歴史家は「これを排除するのではなく積極的に交流すべきである[8]」とし、社会史は近代性の産物であるのだから、ポスト・モダンの時代には当然旧来の社会史は終焉を迎えなければならないと主張した。即ち、「もし社会史が近代性のプロジェクトの所産であるとみなされるならば、このことは社会史の終焉の表れかもしれない。潔白はひとたび失われると、再獲得することはできない。しかしながら、終焉の兆候があるあいだに『社会史』の自己省察的歴史的理解をすれば、この終焉を乗り越え、再生された社会史 reconfigured social history への、何か新しいもの something new への方向を示すかもしれない[9]」と。こうして権力の歴史・知の体制をつくっていた既存の概念をひとたび懐疑し相対化しなければならないと主張し、「社会史の基礎として批判されてきた二つとは、『物質的なるもの』'material' と『社会的なるも

の『social'であり、それらと同じ起源の階級 class という考えである」[10]とした。このように、旧来の社会史が基づいていたマルクス主義の概念を放棄しなければならない、代わってポスト・モダニズムに依拠して社会史を再構成することは可能であり、それをしなければならない、と主張したのである。

では、ジョイスが批判の対象とした旧来の社会史とは何か。それは古い政治史から「社会」の歴史へと移行した結果形成されたのだが、それが〔ホブズボームのような〕マルクス主義であれ、〔E・P・トムソンのような〕「下からの歴史」を唱えるポピュリズム'history-from-below'populismであれ、〔ヴェーラーのような〕社会科学的「構造史」'structural history'であれ、「社会的なもの」を決定要因とする唯物論に基礎付けられており、「この歴史学が『文化史』になっても、基本的考えは階級および政治は物質生活の現実性に基礎付けられるとしたものだった。」[11]そのなかで、「階級」概念は、物質と思想・政治を結びつける「連結概念」'junction concept'の作用をしていた。しかし次第にグラムシの影響もあって「階級」は経済的関係から生じ、文化や「意識」の基本的性格を規定するとみなされるようになった。そして、ジョイスはこのように理解されたマルクス主義は一九世紀的認識論に依拠しており時代遅れであるとする。同じく旧来の社会史を批判すスウェルに依拠して、マルクス主義が物質と精神を分けるのは、「伝統的なキリスト教と貴族的言説から生じてきた」一九世紀的認識である[12]と指摘するのである。「階級」についても、ジェンダーと同じく、外部の対象から生じるのではない、「社会的なもの」もそれ自身歴史の言説の産物であるとする。こうして「物質的なもの」「社会的なもの」の規定性を理論的基礎とするマルクス主義が批判される。それだけでなく、階級 class、社会 society、経済 economy、理性 reason、自己 the self といった概念は、全て近代性の例証とみなされ、近代性が創造したものであるが故にこれらの概念は全て否定されなければならない、と主張するのである。

では、それに代わるジョイスのポスト・モダニズムの内実は何か。かれはエリアスやハバーマスも挙げるが、

最も強く影響を受けたのはフーコーの権力論である。「いまや研究すべきは、いかにして意味が権力関係によって創造されるかであって、外部の、客観的階級構造、その他の社会的対象からではない」[13]、「社会と社会的なものへの伝統的アプローチの限界から我々を最も徹底的に解放したものこそフーコーの仕事である」[14]と述べ、言説と権力の関連を解き明かしたとしてフーコーを高く評価する。そして、フーコーの後の作品では近代国家の役割としての「統治の技術」‘governmentality’ or the ‘art of government’が解明されたとして、これもまた高く評価している。注目すべきは、自由主義 liberalism は「統治の技術」とみなされ、階級に起源をもつものではない、とされている点である[15]。したがって自由主義は旧来の社会史のようにミドル・クラス（ブルジョアジー）の階級利害を体現する思想や運動ではなく、近代国家の統治のひとつの形態とみなされる。このような観点が、近年、一九世紀後半と二〇世紀の自由主義の研究、とくに「民衆的自由主義」‘popular liberalism’の研究（後述）を促進することに連なるのである。

いずれにせよステドマン・ジョーンズとジョイスは、共通して旧来の社会史をマルクス主義に基づくものと批判し、「階級」概念の歴史研究における有効性を否定し、「グランド・ナラティヴ」を否定した。それが歴史の法則的把握を否定することになるのは不可避的である。

二　旧来の社会史による一九世紀イングランドの歴史把握

以上のようなポスト・モダニストの歴史把握を検討するために、まず、彼らが批判した旧来の社会史研究は、一九世紀イギリスをどのように捉えていたのかについて略述しよう。旧来の社会史研究のなかで中軸をなしたマルクス主義史家は、産業革命の結果、生産手段をもたない労働者階級が即自的（アン・ズィッヒ）に形成され、

さらに階級意識をもった向自的（フュア・ズィッヒ）階級に発展していくと捉えることからはじめた。これはエリック・ホブズボーム、ロイドン・ハリソン、ジョン・サヴィルなど伝統的なマルクス主義の階級形成理論であり、とくに一九六〇年の労働史研究協会 Society for the Study of Labour History の設立以降おびただしい成果を生みだしてきた。一九世紀のイギリス労働史に関する研究は、この「階級」概念を軸に展開されてきたといってよい。他方、E・P・トムソンは土台が上部構造を規定するとした史的唯物論の基本テーゼそのものを否定し、「文化」の独自性を強調したいわゆる「文化的マルクス主義」を提唱した。この方法によるトムソンの『イングランドにおける労働者階級の形成』（一九六三年）は民衆文化・民衆運動の解明に成功し、『形成』はその後のイギリス社会史研究に決定的影響をおよぼした。(16)

階級意識をもった（向自的）労働者階級の最初の運動として注目されたのは、チャーティズムであった。チャーティズムは、一八三八－一八四八年までの間、普通選挙権を求める人民憲章をかかげ、イギリス中を揺り動かした最初の労働者階級の運動であった。一八三二年の（第一次）選挙法改正によりミドル・クラスの選挙権は認められたが労働者階級には認められず、裏切られた労働者階級がその後自らの選挙権を求めて立ち上がったのである。

チャーティズムについては長い研究史があり、運動当時のガメッジから第一次大戦直後の革命的潮流のなかでの研究の興隆、第二次大戦後の運動指導者の研究など、研究の興隆にはサイクルがあったが、とくに一九八〇年代はサヴィル、ドロシー・トムソンなど研究が続出し、「チャーティズム研究のルネサンス」とさえ呼ばれた。(17) こうした研究によってチャーティズム研究は拡大・深化し、公式的な理解は克服されていった。チャーティズムが生じた原因は産業革命の結果労働者が貧困化したからである、というような公式的な把握は現在では否定されている。マンチェスターなど大工場が成立した都市がチャーティズムの中心にはならなかったし、むしろ工業都

市周辺の小さな町でチャーティズムが起こったからである。また、運動の担い手は工場労働者ではなく、小規模なワークショップのアルティザンといわれる熟練職人であり、かれらが運動を起こしたのは機械化がかれらの伝統的熟練技術（スキル）を奪うことに脅威を感じたからであった。チャーティストは武力派（革命派）と道徳派に区分されるのではなく、同一人物が経済状況などにより両派の間を移ったということも分かってきた。また、チャーティズムは選挙権を求める政治闘争であるから、経済的要求を掲げる労働組合とは無縁であったという把握も、一八四二年のマンチェスターにおける「ゼネスト」によって修正を求められた。これは「点火栓抜き暴動」といわれるもので、人民憲章が容れられるまではストライキを止めないと宣言した労働者が、マンチェスター郊外から市に向けて、街道沿いの工場の点火栓を抜きながら行進したものである。「暴動」ではなく、事前によく組織された「ゼネスト」であり、チャーティズムは労働組合とは無縁であるとの考えを覆した。さらに、チャーティズムの指導者ファーガス・オコンナーの「土地計画」は、イングランド北部の工業労働者を南部に入植させ農民化する計画であったが、労働者の農民化という歴史に逆行する「大愚行」であり、一八四八年四月一〇日のチャーティズム敗北の主要な原因であるとする見解についても、ドロシー・トムソンが明らかにしたように、土地計画会社の支部のあったところでチャーティズムが強かったことが分かり、いまでは土地計画はチャーティズムをむしろ促進したという従来とは正反対の見解が認められている、等々。このような長いチャーティズム研究史の成果を全否定したのが、ステドマン・ジョーンズである。彼の「チャーティズム再考」を検討する前に、チャーティズム敗北以降、一九世紀後半を旧来の社会史はどのように把握したかを述べておこう。

一八四八年にチャーティズムが運動としては敗北すると、思想としてはジュリアン・ハーニーやアーネスト・ジョーンズが継続的に展開するが、イングランドの運動は全般的に停滞した。この社会運動の停滞の原因は、「新型組合」‘New Model Union’と「労働貴族」‘labour aristocracy’の二つの概念で説明しうる。「新型組合」

はベアトリス・ウェッブの命名になるものだが、機械工や大工・指物師など熟練労働者による全国組合のことであり、これらの組合も含めて労働者階級の一〇％を占める労働貴族が労働運動を推進したが故に、運動が労使協調的、体制内的運動になったと捉えた。その後一八八九年にロンドンのマッチ女工、ドック労働者、ガス労働者といった「不熟練労働者」のストライキが社会主義者を指導者として初めて勝利し、それ以降不熟練労働者の組合（「新組合」'New Union'）がつくられ、運動は再度戦闘性を回復し、一九〇〇年の労働党の成立をもたらした。チャーティズムは世紀末に戦闘的労働組合運動・社会主義運動として復活したと捉えるのである。このように、旧来の社会史家は、一九世紀を社会運動の興隆、衰退、興隆と段階的に捉え、ターニング・ポイントは一八五〇年頃と一八九〇年頃にあると捉えたが、この不連続性のなかに各段階の本質的特徴を把握しうるとしたのである。

もっとも、こうした把握はすでに一九六〇年代・七〇年代からヘンリー・ペリング、A・E・マッソン、ヒュー・クレッグなど非マルクス主義史家によって批判されていた。[18] 彼らの批判の要点は、チャーティズムに関しては、労働者は日常的な賃金引き上げや労働条件の改善を求めて運動するが、労働者の階級意識などというものはもともと存在しない（マッソン）、「新型組合」も「労働貴族」もウェッブやマルクス主義史家がつくった神話にすぎない（ペリング、マッソン）、チャーティズムは敗北したのではなく世紀中頃以降自由主義の中に流れ込んでいった、世紀末の不熟練労働者の「新組合」も神話であり、その組合員は不熟練労働者とは限らなかったし、全てが社会主義者に指導されたわけでもない、「新組合」の組合員数は全国の組合員全体の一〇％を占めるにすぎず、残りの九〇％の組合は依然として熟練労働者から成る組合であった（クレッグ）等々にあり、総じてターニング・ポイントなど存在しないとし、歴史をフラットに捉える連続説を唱えたのである。

三　ステドマン・ジョーンズの「チャーティズム再考」

では、ステドマン・ジョーンズはどのようにチャーティズムを「再考」したのだろうか。彼は、一九八一年の論稿「チャーティズム再考」のなかで、ガメッジからドロシー・トムソンやサヴィルまでそれまでのチャーティズム研究を全て旧来の方法によるものとして根こそぎ否定した。それはアーカイヴで史料を集め分析しても歴史的事実は捉えられないとするポスト・モダンの方法を最初に歴史研究に適用した結果であった。彼は、チャーティズムの従来の解釈はいずれも社会的、経済的脈絡で捉え、労働者階級の運動として捉えたため、ミドル・クラスまで含めた政治運動であった点を看過したという。即ち、

「チャーティズムの歴史は、チャーティズムがその表現であるとされる社会的経済的苦情の脈絡では十分書くことができない。かようなアプローチはなぜこれらの不満がチャーティズムの形態をとらざるをえなかったのかを説明しないし、また、何故チャーティズムが新しい諸状況のもとでのその社会的支持者の恐れと熱望の変化を表現しつづけなかったのかを説明しない。」[19]

そして、チャーティズムの地方史研究の出発点になったブリッグス編『チャーティスト研究』（一九五九年）も、プロサロのロンドンにおけるチャーティズム研究も、マエールやサイクスの地方史研究も、ドロシー・トムソンの職業分析も、いずれも地方や職業によるチャーティズムの多様性を明らかにしたが、チャーティズムは地方的・分派的運動ではなく、あくまで全国的運動であり、人民憲章の政治的本質をあいまいにしてはならないと強調した。[20]

そこで彼が旧来の社会史研究に代えて提起したのが、「言語論的転回」の歴史分析への適用であった。「私はチャーティズムの社会的意味について歴史家がア・プリオリに仮定したことから自由になって、チャーティズムの

政治学を前面にだすために、チャーティストの演説と著作の研究に対し、言語が指示対象をもたないという観念 a non-referential conception of language を適用した。[21]」つまりソシュールの言語論を応用し、「言語内部における、用語と提議との系統的関係を探究する」'the systematic relationship between terms and propositions within the language' というアプローチによって「政治学に本来の重要性を回復させる[22]」ことを意図したのである。なぜ言語学なのか。ステドマン・ジョーンズは次のようにいう。

「『労働者階級』ないし『労働者諸階級』の政治史を書き直すために、我々は、鎖の他の端から出発すべきである。言語は、社会的存在によって意識が規定されるというような単純な主張を崩壊させる。なぜなら、言語自体が社会的存在だからである。それ故、我々は、利害関心の根本的実態的表現に到達するものとして、政治言語を解読することはできない。それは、第一に利害を了解し規定するものは、政治言語の言説的な構造 discursive structure だからである。我々は急進主義、自由主義、社会主義等の一連の言語を、それらの言語が代替する政治言語の関係のなかで、および、側面的にはそれらの言語が闘争する対抗的政治言語の関係のなかで、精密に策定する必要がある。そうしてのみ、我々は特定の諸時点におけるその言語の成功あるいは失敗の理由を評価しはじめることができる。[23]」

彼は、その言語として「急進主義」'radicalism' を抽出する。この用語は「愛国的」'patriotic'、「独立した」'independent' とともに一七世紀に起源をもち、一七九〇年代に「民衆的」'plebeian'、「民主的」'democratic' という意味をもつようになる。この「急進主義」はナポレオン戦争後、領域は拡大したが、労働者階級のイデオロギーにはなりえなかったという。そこにはチャーティズムは決して労働者階級の運動ではないことが含意されていることに注意する必要があろう。主要な対立はミドル・クラスと労働者階級の間にあったのではなく、政治的腐敗と政治権力の独占による受益者と非受益者＝「ピープル」「ネイション」の間にあった、即ち、チャーティストの敵は経済的搾取者ではなく、政治権力の非道徳的利用者が敵であった、というのである。[24]

このようにみてくると、「チャーティズムとそれ以前の急進主義の諸形態との間の、ほとんどの歴史家が考えていた以上のより強い連続性」[25]があったということになる。ステドマン・ジョーンズは、「言語論的転回」を歴史研究に適用することにより、チャーティズムだけでなく、生活水準論争、労働貴族論争、産業革命が生じたか否かをめぐる論争等々における連続説対不連続説の対立も、一挙に全て解決するとして、「一九世紀と二〇世紀の社会史の連続性・不連続性に関する長いあいだの論争が提起した謎を解くことを可能にする」[26]と宣言したのである。

だが、このような方法にはいくつかの問題点があると私は考える。第一は、言語を抽出して各時代の運動をその諸形態と見る方法は、必然的に連続説になることは議論の初めから前提されていることであり、なにも「急進主義」という言語を遡って追跡した結果としてでてきたことではない。結果としてではなく、前提されているという点である。

第二は、「急進主義」なり何なりの言語を抽出してくるさいの恣意性は逃れがたいという点である。なぜ、「独立」や「愛国的」という言語ではないのか、という説明がつかないのである。これはディスコース論の致命的欠陥であると私は考える。

第三は、現実には言語は時代によってその意味内容を変えるので、その説明は「社会的なもの」を排除するかぎり同義反復に陥るという点である。このことはステドマン・ジョーンズにも十分に意識されているが、「階級」による規定性を排除するので、言語の意味内容の変化の説明は不可能になっている。あえてそれを行なえば、次のような無理な叙述にならざるをえない。「それが［急進主義が］事実上一八三〇年代四〇年代にますます『労働者階級』の排他的所有になったとしても、これはイデオロギーそのものを基本的に再構成するにはいたらなかった。急進主義の自己規定は何らの特定の集団のそれではなく、政治的代表権と権力、それ故に財政的経済的権

力を独占する者に対抗する『ピープル』あるいは『ネイション』のそれである。」この主張にはポスト・モダニズムの特徴である「作者の不在」がみられる。誰があるいは何がその変化をもたらしたのかは問われない論理になっている。しかしながら、この論理には解決できない矛盾がある。即ち、ステドマン・ジョーンズは、すでに指摘したように、「言語の内部における、用語と提議との系統的関係を探求する」ことを掲げ、「第一に利害を了解し規定するのは、政治言語の言説的構造」であるとして、実体的な階級形成との関連でチャーティズムを分析した従来の諸研究を批判した。にもかかわらず、上の引用文に「『労働者階級』の排他的所有になったとしても」という文章を密かに挿入するのである。つまり、直接指示対象をもたないはずの言語の意味内容を、階級という実体をいれて説明しているのである。それは、一八三〇年代四〇年代には労働者階級の存在をどこかで認めなければならないからである。さもないと、「急進主義」は一七世紀以来イングランドで連綿とつづいてきたとして連続性だけを主張することになり、それではいくら「言語論的アプローチ」といってもイギリスの史実と乖離してしまうからである。

四　「階級の言語」をめぐる論争

ステドマン・ジョーンズの「チャーティズム再考」が発表された直後から、J・フォスター、J・E・クローニン、J・イプスティン、P・マンドラー、P・A・ピカリング、R・グレイなどによる批判が現れた。

フォスターはステドマン・ジョーンズがチャーティストの言説に注目したことを一面評価し、その言説には多義性があり「言語が政治的に効果的であるのはまさにその両義性による」とする。「この点でステドマン・ジョーンズが全国的運動としてのチャーティズムに焦点を合わせ、また言及の中心点として人民憲章に焦点をあわせ

ることを主張するのは全く正しい。しかし、だからといってチャーティストの発言が独自の意味を持っており、それはかれらの祖先のより古い急進主義に言及することにより論じ尽されると推定するべきではない。その多義性は異なった社会集団による語尾変化であることが可能だったからである。[27]」

クローニンは、ソシュールの言語理論を歴史分析に適用したことについて次のように批判する。「彼〔ステドマン・ジョーンズ〕は言語が指示対象をもたない non-referential とするアプローチを主張するけれども、チャーティズムの意義の彼の言語分析は完全に指示対象をもっている referential。……ステドマン・ジョーンズがこの論稿で行なったことは、チャーティズムの言語を社会的現実性よりも政治的現実性に関連付けることであるが、しかし、社会的指示対象を政治的指示対象と置換することは、指示対象をもたない言語アプローチを採用することと同一のことでは全くないのである。理論的にはもちろん、指示対象をもたない言語アプローチを歴史研究に利用することは可能かも知れないが、しかし、ステドマン・ジョーンズが、実際にそうしなければ重要で思慮深い論稿において、それをなしたようにはみえない。これはかような理論に導かれる歴史研究の実効性について疑念を強化するのに役立っただけである。[28]」

同様の批判はイプスティンによってもなされた。「その議論はチャーティストの『言語』を構成するのは何かという問題に真に直面しようとしていない[29]」と述べ、チャーティズムの言語は大衆集会の演壇上の主張であるはずであるのにそれに注意を払っていないし、「ステドマン・ジョーンズは公的政治的言説の用語が本質的に不安定であることを認めるのに完全に失敗している。『ピープル』（あるいは『プロパティー』とか『ペイトリオット』とか『インダストリアス』）とかいった用語は、チャーティストの言説の内部において広範囲な意味をもっていたのであるが、より重要なことは、これらの意味が他の社会集団が与える強調に対応して構成されたということである[30]」と批判的である。そして、「彼の『言語は指示対象をもたないという観念』'a non-referential conception

of language' が、どのように変化する社会諸関係と政治言語の間のダイナミックな相互関係と適合するのかは不明瞭である[31]」と指摘して、「言語論的転回」が歴史のダイナミックな変化を解明できる理論装置たりえないのではないかと疑問を呈している。

このようなステドマン・ジョーンズの「チャーティズム再考」に対する一連の批判の延長線上で、一九九二年以降『社会史』誌上で「階級の言語」をめぐる論争が生じた[32]。メイフィールドとソーンは、共同論文「社会史とその不満、ガレス・ステドマン・ジョーンズと言語の政治学」のなかで、彼の「言語論的転回」を狭い唯物論から解放した点は評価しつつも、社会的脈絡から分離してテクストの言語に還元する方法を、歴史的変化が何故生じるかが説明できない「言語論的決定論」であるとして批判した。加えて、ジョイスもステドマン・ジョーンズもポスト・モダンニズムとポスト・構造主義を誤解して論じているときめつけた。これに対して、ローレンスとテイラーは、共同論文「抗議の貧困、ガレス・ステドマン・ジョーンズと言語の政治学―ひとつの回答」で反論を加え、メイフィールドとソーンは「階級の言語」が書かれたイギリスの社会史研究の状況、とくにE・P・トムソンをめぐる論争という脈絡を理解していないと指摘した。さらにヴァーノンは「『言語論的転回』を恐れるのは誰か?」という挑発的論文のなかで、メイフィールドとソーンもローレンスとテイラーも、前者は言語論的転回に挑戦しているのに対し、後者は挑戦していないという違いはあるものの、両者とも言語論的転回を恐れている人々とみなし、次のようにいう。「私〔ヴァーノン〕は想像するのだが、言語論的転回をとりつづける我々のほとんどはメイフィールドとソーンの指摘とは反対に、次のように主張するだろう。現実とは言説的構成物でもあるが、それを通して理解しようとして諒解する主観性でもあるのと全く同じように、認識とは常に、社会的権力の諸関係と分かちがたく結びついている社会的過程である[33]。」論争は決着をみず、現在もつづいている。

五　リベラリズム研究の主流化

ステドマン・ジョーンズがチャーティズムとそれ以前の急進主義の連続性を主張すると、チャーティズム以降、中期ヴィクトリア期を経てグラドストンの自由主義とさらにその後への連続性までは半歩の距離もなかった。チャーティズムの「崩壊」後それは一九世紀後半の自由主義へと連続していくと捉えるのである。かつてウェッブが「新型組合」として特徴づけた一八五〇年以降の労働運動・社会運動の穏健化・体制内化は、旧来の社会史の理解であるとして廃棄された。チャーティズムの戦闘性が一九世紀末に社会主義として「復活」したとする段階論は批判され、歴史がフラットに捉えられた。その代表的な書物はバイジーニなどが著した二冊であり、[34]そこでは公式の組織の歴史よりも、組織が民衆の（アナールの意味での）マンタリテにどう対応したかが扱われ、「民衆的自由主義」‘popular liberalism’, or ‘plebeian liberalism’の連続性が強調されている。

旧来の社会史では、一八五〇年以降一八九〇年ごろまでの時期は全体として戦闘性が見られない安定的社会であったため、労働者階級の「虚偽の階級意識」‘false class consciousness’が問題とされたが、このリベラリズム強調史観では、虚偽の意識などは当初から問題とされない。逆に、一八七〇年代八〇年代の「運動の谷間の時代」は戦闘的運動が再興するまでの繋ぎの時、休眠の時代ではなく、自由主義労働組合指導者は権力の手先でもなければ日和見主義者でもなく、積極的に評価される。例えば、ロバート・ナイトというボイラーメイカー労働組合の指導者は、ホブズボームの『労働の転換点』（段階論を示す旧来の社会史の典型的な労働史の本）では労働貴族の典型とされていたが、『急進主義の潮流』のなかではアルステア・リードにより八時間労働制など社会主義者の政策に理性的に反対した賢明は社会観をもっていた人物として描かれている。

既に述べたように、一九六〇年代からマルクス主義の労働史に対しペリング、マッソン、クレッグなどから批

判がだされ、労働者階級の形成の時期、階級と運動の関係、階級と政治・文化との関係等など多くの論争がなされてきた。だが、これらの論争では分析概念として「階級」概念が前提とされていた。しかし現在は、「階級」概念を統一的理解のために使用することに否定的な傾向が強まり、労働史から社会史へと発展してきたイギリスの研究の足元が崩されようとしているのである。グレイの言葉を借りれば、「いまや修正の過程にはより自覚的な『修正主義』が加わった。それは階級分析の全プロジェクトへの挑戦であり、とりわけ社会史的説明を主張することへの挑戦を含意している。[35]」

「階級」概念の否定が、現実の労働運動・社会運動の衰退を間接的であれ反映した結果であることは間違いないだろう。社会変化に影響を与えるような大規模な目的的行動の可能性と切り離す傾向が強まり、それにともない、グランド・ナラティヴが否定され、階級、国家、工業化、近代性などが論議の対象から脱落するようになり、全体史の構築などはユートピアとして否定され、経済的・社会的説明に代わって政治史・制度史が再評価されている。

歴史をフラットに扱う研究にとって、変化の理由を説明する労働貴族論も否定されたのはいわば当然であった。ステドマン・ジョーンズも「労働者階級の政治を保守的に中断した『労働貴族』という想定上の存在は、神話であること」が歴史家の経験主義的研究によりいっそう確認されたとして、マルクス主義の硬直性を示す根拠にしたことは前述したとおりである。しかしながら、これは誤解に基づく否定である。労働貴族論は労働者階級の政治を保守的に中断したというような単純な議論をしていない。ホブズボームが週二八シリング以上の賃金を得るものを労働貴族とし、労働者階級の一〇％がそうであるとした経済決定論的労働貴族論は、R・ハリソンの政治的分析、さらにクロシックやグレイの労働貴族が地域社会のなかで社会的に形成されるとした社会的分析へと発展させられた。労働貴族は労働平民に対しては保守的役割を果たすのに対し、ミドル・クラスに対しては労働者

階級全体の利害を代弁するという進歩的役割を果たすとする労働貴族の二重性も明らかにされた。そのどちらの側面が強くでるかはその時の歴史的状況によるのであり、労働貴族が常に保守的であったわけではないのである。実証的にも労働貴族は経済的、政治的、文化的な分析によってその存在は論証されており、ステドマン・ジョーンズの労働貴族論否定は誤解に基づくものといわざるをえない。[36] 私は、総じて一九世紀以降のイギリス史の分析においては、自由主義のみを分析対象とするのは誤りであり、社会主義（そのイギリス的形態であるレイバリズム）と自由主義の対立と競合こそ追究されるべきであると考える。[37]

六　ポスト・モダニズムの終焉？

ジョイスの論稿「社会史の終焉？」に批判を加えたのは、イリーとニールドであった。現実には「多数のマルクス主義」（many marxisms）があったにもかかわらず、ジョイスが批判の対象にしたのはソ連と結びついた教条的なマルクス主義であった。フランクフルト学派だけでなく、一九五六年以降の反スターリン主義、ニュー・レフトがあり、グラムシ、アルチュセールは一九六〇年代以降広く受容されたといったように、総じてマルクス主義は多元的であった。ジョイスのポスト・モダニズムに決定的な影響を与えたフーコーでさえ、一九五〇年代六〇年代のフランス左翼の文化のなかで育ったのだが、その文化はマルクス主義を真摯に受け入れて変容したものであった。にもかかわらず、ジョイスはマルクス主義の多元性を無視し、「階級を分析的に構築する多くの異なった方法は消し去られ」、「ジョイスは単一の、自明の誤った考えに還元している。――即ち、階級利害と階級意識という還元的な対句にである。そこでは第二の〔階級意識の〕論理は第一の〔階級利害の〕形態や形成のなかに構造的に印される。」ジョイスにあっては、「階級分析の擁護者はゼロサム選択を提供される。即ち、階級概

念の『真摯な』内的に首尾一貫した使用は、『客観的階級利害』の受容と階級物語を信じることの双方をマルクス・レーニン主義の正統性が構築しただろうものとして求めることになる、と告げられる。……このような観点から階級分析は歴史学でも政治学でも作動しないし、その概念は単に捨てられるべきものとなる。階級分析の有効性はここでは、あたかも階級が理解されうる正統な方法を疲弊させるような、公認マルクス主義版のいくつかの破綻によって判断されている。」[38] イリーとニールドはジョイスがマルクス主義の多元性をみていないと批判したのである。

イリーとニールドの方法はジョイスのそれとは反対であり、「階級は現在の世界の基本的側面の分析手段として維持できる」とする。即ち、グローバリゼイションが進行しても資本主義が依然として多くの人々を貧困にしつづけるかぎり、階級はその不平等と搾取の論理を明らかにするための何よりも主要な概念である。現在の人種、ジェンダー、セクシュアリティーなどの分析は経済活動（生産物の購買、分配）にとって重要であることは否定できないが、階級はとりわけ欠かせない分析概念である。この方法を彼らはポスト・マルクス主義と名づけている。

「言語論的転回」は歴史学において期待されたようには拡大浸透せず、一九八〇年代半ば以降、イギリスでもアメリカでもフランスでも衰退しはじめた。この衰退に対しかなりの焦燥感をもって書いたのがステドマン・ジョーンズの前掲「決定論の固定」であった。アナールが「言語論的転回」は「歴史的転回」にとって代わった、つまりソシュール的言語論は「状況的記号論」にとって代わった、と主張していることに強い不満を示すステドマン・ジョーンズは、何故、「言語論的転回」がその後衰退したのかの解明に向かった。

衰退の最大の原因は、「言語論的転回」がミシェル・フーコーに始まると多くの人が誤解している点にあるという。フーコーは所詮「戦後フランスの社会史の二つの主要な源泉――アナールとマルクス主義――の仮定と過

程の更新であり、哲学的に現像された再言明[39]」であるにすぎないというのである。フーコーはアナールからは「作者の死」を吸収した（ニーチェの「神の死」になぞらえてフーコーでは「人間の死」と誇張された）が、歴史における主体の意義を降格させる新しい言語論の方法は、ルシアン・フェーブルの唱えた「マンタリテ」以来のものであって、そこにはフーコーの独創性はない。マルクス主義については、フーコーは『事物の秩序』ではそれが目的論的であり経済決定論である一九世紀初期の古いエピステーメに属するものとして反対したが、しかしながら、『規律と処罰』のような他の著作ではフーコーの主張はマルクス主義と類似しており、とくにアルチュセールなど反人間主義的、構造主義的マルクス主義者とは法律、政治、イデオロギーの扱い方の点でその類似性は極めて大きい。非歴史的なフーコーの分析は、生産関係より規律強制のメカニズムを明らかにしようとするものであるが、『規律と処罰』にみられるような規律の拡大・強化と一般化はマルクスの理論の枠をでていないし、ソーシャル・コントロール論の機能主義的分析に依拠しているところも大きい。結局のところ、言説＝「知の権力」が社会的歴史的諸力を生み出すというのは同義反復に陥ることになる。それ故、ステドマン・ジョーンズは、「フーコーのアプローチは新しい歴史の約束を完遂することからは程遠く、一九七〇年代の不器用な社会学と社会史の還元主義的実践の顕著な例である[40]」と切って捨てるのである。このようなフーコーを「言語論的転回」の主唱者と誤解したところに、一九八〇年代以降「言語論的転回」がマルクス主義に代わるものとして展開を示すどころか、衰退した原因がある、というのがステドマン・ジョーンズの結論である。

確かに、資本主義的生産様式の規定的な概念（「階級」はそのひとつ）を排除し、日常的であれ国家的であれ超歴史的な権力論を代置しても、現代社会の分析は可能とならないであろう。社会史の研究にとってジェンダー、エスニシティーは間違いなく重要な概念であるが、しかし「階級」概念に取って代わられるべきではなく、「階級」概念を中軸にすえながらそれとの関連でジェンダーなどが分析されるべきであろう。「階級」概念はけっし

て時代遅れではないのである。

(1) Gareth Stedman Jones, 'The Determinist Fix: Some Obstacles to the Further Development of the Linguistic Approach to History in the 1990s', *History Workshop Journal*, 42, 1996, p. 19.

(2) Gareth Stedman Jones, *Languages of Class, Studies in English Working Class History, 1832-1982*, 1983.

(3) Stedman Jones, 'The Determinist Fix', p. 19.

(4) *Ibid*., p. 19.

(5) *Ibid*., pp. 19~20.

(6) Asa Briggs, 'The Language of "Class" in Early Nineteenth Century England', in A. Briggs and J. Saville eds., *Essays in Labour History*, vol. I, 1960; William. H. Sewell, *Work and Revolution in France: the Language of Labour From the Old Regime to 1848*, 1980.

(7) Stedman Jones, 'The Determinist Fix', p. 20.

(8) Patrick Joyce, 'The end of social history?', *Social History*, 20-1, January 1995, p. 73.

(9) *Ibid*., p. 74.

(10) *Ibid*., p. 74.

(11) *Ibid*., p. 75.

(12) William H. Sewell, 'Towards a post-materialist rhetoric for labour history', in Leonard R. Berlanstein ed., *Rethinking Labour History: Essays on Discourse and Class Analysis*, 1993, quoted in Joyce, *ibid*., p. 76.

(13) *Ibid*., p. 82.

(14) *Ibid*., p. 86.

(15) *Ibid*., pp. 86~87.

(16) E. J. Hobsbawm, *Labouring Men*, 1964; R. Harrison, *Before the Socialists*, 1965; E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, 1963, etc.

(17) John Saville, *1848, the British State and the Chartist Movement*, 1989; Dorothy Thompson, *The Chartists, Popular Politics in the Industrial Revolution*, 1984.

(18) H. Pelling, *Popular Politics and Society in Late Victorian Britain*, 1968; A. E. Musson, *British Trade Unions, 1800-1850*, 1972; H. A. Clegg, Alan Fox & A. F. Thompson, *A History of British Trade Unions Since 1889*, vol. I, 1964.

(19) Stedman Jones, *Languages of Class*, p. 96.

(20) *Ibid*., p. 98. I. Prothero, 'Chartism in London', *Past and Present*, 44, 1969; W. H. Maehl, 'Chartist Disturbances in Northeastern England, 1839', *International Review of Social History*, VIII, 1963; R. Sykes, 'Early Chartism and Trade Unionism in South East Lancashire', in J. Epstein and D. Thompson, *The Chartist Experience*, 1982.

(21) Stedman Jones, *Languages of Class*, p. 21.

(22) *Ibid*., p. 21.

(23) *Ibid*., pp. 20~21.

(24) *Ibid*., p. 104.

(25) *Ibid*., p. 110.

(26) *Ibid*., p. 21.

(27) John Foster, 'The Declassing of Language', *New Left Review*, 150, 1985, p. 373.

(28) James E. Cronin, 'Language、Politics and the Critique of Social History', *Journal of Social History*, 20-1, Fall 1986, p. 180.

(29) James Epstein, 'Rethinking the Categories of Working-class History', *Labour/Le Travail*, 18, Fall 1986, p. 199.

(30) *Ibid*., p. 200.

(31) *Ibid*., p. 202.

(32) P. Joyce, L. Stone, C. Kelly and G. M. Spiegel, 'History and Post-modernism', *Past and Present*, CXXXI, May 1991; CXXXIII, November 1991; CXXXV, May 1992; R. Samuel, 'Reading the Signs', *History Workshop Journal*, 32, Autumn 1991 and 33, Spring 1992; D. Mayfield and S. Thorne, 'Social history and its discontents: Gareth Stedman Jones and the politics of language', *Social History*, 17-2, May 1992; J. Lawrence and M. Taylor, 'The poverty of protest: Gareth Stedman Jones and the politics of language- a reply', *Social History*, 18-1, January 1993; P. Joyce, 'The imaginary discontents of social history: a note of response to Mayfield and Thorne and Lawrence and Taylor', *Social History*, 18-1, January 1993; T. C. Patterson, 'Post-structuralism, post-modernism: implications for historians', *Social History*, 14-1, 1989; James Vernon, 'Who's afraid of the 'linguistic turn'?', *Social History*, 19-1, January 1994; Neville Kirk, 'History, language, ideas and post-modernism: a materialist view', *Social History*, 19-2, May 1994; Miguel A. Cabrera, 'Linguistic approach or return to subjectivism?: In search of an alternative to social history', *Social History*, 24-1, January 1999.

(33) Vernon, 'Who's afraid of the 'linguistic turn'?', p. 96.

(34) Eugenio F. Biagini, *Liberty, Retrenchment and Reform: Popular Liberalism in the Age of Gladstone, 1860-1880*, 1992; Eugenio F. Biagini and Alastair J. Reid eds., *Currents of Radicalism: Popular Radicalism, Organized Labour and Party Politics in Britain, 1850-1914*, 1991.

(35) Robert Gray, 'Class, politics and historical 'revisionism'', *Social History*, 19-2, May 1994, p. 210.

(36) Takao Matsumura, *The Labour Aristocracy Revisited: the Victorian Flint Glass Makers, 1850-80*, (Manchester University Press), 1983.

(37) 松村高夫「タフ・ヴェイル判決とイギリス鉄道労働運動」（一）－（七）『三田学会雑誌』七九－五、一九八六年一二月－八七－四、一九九五年一月は、社会主義と自由主義の対立と競合を解明すべく試みたものである。

(38) Geoff Eley and Keith Nield, 'Starting over: the present, the post-modern and the moment of social history', *Social History*, 20-3, October 1995, p. 358.

(39) Stedman Jones, 'The Determinist Fix', p. 22.

(40) *Ibid.*, p. 25.